

平成29年 3 月17日

1 番 杉 原 元 博
3 番 樋 口 作 二
4 番 中 村 和 典
5 番 松 田 義 太
6 番 中 村 一 堯
7 番 稲 富 雅 和
8 番 勝 屋 弘 貞
9 番 角 田 一 美

10 番 伊 東 茂
11 番 松 本 末 治
12 番 徳 村 博 紀
13 番 福 井 正
14 番 松 尾 征 子
15 番 光 武 学
16 番 松 尾 勝 利

2 . 欠席議員

2 番 片 渕 清次郎

3 . 本会議に出席した事務局職員

事 務 局 長 有 森 弘 茂
議 事 管 理 係 長 迎 英 昭
議 事 管 理 係 主 査 江 頭 英 喜

4. 地方自治法第121条により出席した者

市	長	樋口	久俊
副市	長	藤田	洋一郎
教	育	江島	秀隆
総務部	長	橋村	勉
市民部長兼福祉事務所長		打上	俊雄
産業部	長	有森	滋樹
建設環境部	長	森田	博
会計管理者兼会計課長		吉田	範昭
総務課長兼人権・同和対策課長		大代	昌浩
企画財政課長兼選挙管理委員会事務局参事		土井	正昭
企画財政課参事兼選挙管理委員会事務局長		寺山	靖久
市民課	長	幸尾	かおる
税務課	長	川原	逸生
福祉課	長	橋村	直子
保険健康課	長	田崎	靖
農林水産課	長	中島	憲次
産業部農政企画監		橋口	浩
農業委員会事務局長		江口	清一
商工観光課	長	山浦	康則
産業支援課	長	江島	裕臣
都市建設課	長	岩下	善孝
都市建設課参事		岸川	修
環境下水道課長兼ラムサール条約推進室長		栗林	雅彦
水道課	長	小野原	隆浩
教育次長兼教育総務課長		染川	康輔
教育総務課参事		針長	三州
生涯学習課長兼中央公民館長		山崎	公和

平成29年 3月17日（金）議事日程

開 議（午後 1 時30分）

日程第 1 一般質問（通告順による）

平成29年鹿島市議会 3月定例会一般質問通告書

順番	議 員 名	質 問 要 旨
4	13 福 井 正	<p>1．鹿島市の交通体系について</p> <p>(1)長崎新幹線開業後の長崎本線の利便性について</p> <p>(2)肥前鹿島駅及び駅前開発について</p> <p>(3)市道井手～西葉線の今後の整備状況について</p> <p>(4)中牟田・御神松線ハローワーク周辺の整備状況について</p> <p>(5)乙丸・吹上線の整備の可能性について</p> <p>2．災害時の危機管理 B C P（業務継続計画）について</p> <p>(1)災害時の下水道利用について</p> <p>(2)災害時の職員配置及び行動計画について</p>
5	3 樋 口 作 二	<p>社会の進化の中から獲得した自由、平等、友愛、正義といった人類の英知が、このところ相次いで生まれる不安定な国際状況の中で後退を余儀なくされ、市民の動揺も感じられる。また、経済優先施策の下で、貧困の格差が拡大し、庶民の不満も高まっている。しかし、このような国際状況の中だからこそ、揺るがない信念を持った鹿島市を目指す必要がある。</p> <p>1．鹿島ならではの成熟社会とは？</p> <p>(1)国家エゴ丸出しの国際社会や品性にかかる国家トップの出現をどう考えるべきか</p> <p>(2)あまりにも貧富の格差の大きい国際状況や経済優先思考をどう考えるべきか</p> <p>(3)鹿島が目指す成熟社会のあり方はどうあるべきか</p> <p>成熟社会とはどのような社会か</p> <p>ブータンの施策、国民総幸福量について</p> <p>ウルグアイ前大統領 ホセ・ムヒカ氏について</p> <p>成熟した社会における子ども世界のあり方について</p> <p>2．若年無業者について</p> <p>(1)若年無業者の定義について</p> <p>(2)鹿島市の取り組みの現況</p> <p>(3)引きこもり者への対応について</p>

午後 1 時30分 開議

議長（松尾勝利君）

こんにちは。ただいまから本日の会議を開きます。

日程第 1 一般質問

議長（松尾勝利君）

本日の日程は、お手元の日程表どおり一般質問を行います。

ここで申し上げます。13番福井正議員の一般質問の中で、議場モニター映像を利用した一般質問を許可します。

それでは、通告順により順次質問を許します。まず、13番福井正議員。

13番（福井 正君）

皆さんこんにちは。13番議員、福井正でございます。通告に従いまして一般質問をいたします。

きょうの大きなテーマは2つでございまして、鹿島市の交通体系について、これは1つは鉄道のことと、それから駅前、そして、あとは市道の整備について質問します。

2つ目は、災害時の危機管理ということで、BCPという余り聞きなれない言葉でございますけれども、これは業務継続計画ということを書いてございまして、このことについて、いわゆる災害時に災害の後にどういうふうに対処していくかということとございまして、下水道のこと、それから市職員のこと等々について質問をいたします。

鹿島市の交通体系について質問いたしますけれども、まず長崎新幹線開業後の長崎本線の利便性について質問いたします。

九州新幹線長崎ルートは、武雄 - 長崎間を新幹線で、武雄 - 博多間を在来線特急で運行するリレー方式で、2022年度に暫定開業されることとなりました。2022年度の暫定開業から3年間は、肥前鹿島 - 博多間を1日上下14本運行されることとなりました。普通列車は、従来の本数が確保されることになっています。

そこで、質問でございますけれども、鹿島から博多まで運行される特急、これは確認をされましたでしょうか。本当に博多まで行けるかどうかということの確認でございます。

また、フリーゲージトレインの開発が難航しておりますけれども、完成したとしましたら、2025年には当初計画のように特急が上下10本程度に減少されるということになっておりましたけれども、これも確認されているかどうか、お尋ねいたします。

また、車両はディーゼルカーでの運行となっておりますけれども、やはり特急の利便性、速さのほうは私がいいと思いますが、この電車での運行について要望される考えがあるかどうか、お尋ねいたします。

次に、肥前鹿島駅及び駅前開発についてでございます。

肥前浜駅のトイレや駅前広場が整備されるということで、観光客の利便性が向上し、利用しやすい駅になったこととっております。また、肥前鹿島駅は、エレベーター整備、トイレ、それから、ホームのかさ上げ等で大変使いやすい駅にはなったと思います。

そこで、質問でございますけれども、肥前鹿島駅前広場整備の計画がございましたし、今でもあると思いますが、当時は広場にロータリーを整備し、車の流れをスムーズにする計画

だったと思います。今後、どのようになされるかについて質問をいたします。

次に、鹿島市都市計画マスタープランに、市道井手～西葉線整備の記述がございますけれども、現在の進捗状況と完成、大体時期はいつごろになるのか、質問をいたします。

次に、中牟田～御神松線近くのハローワーク前の市道は既に調査が行われたと聞いておりますけれども、現在の進捗状況はどのようになっているのか、お尋ねいたします。

次に、鹿島市都市計画マスタープランに、乙丸～吹上線整備の記述がございます。以前、一般質問で私が質問いたしました、もう10年ほど前になりますけれども、その際の答弁では、巨額の予算を要し、住宅が張りついているために整備困難という答弁でございました。今回、整備、この検討をするという記述がございますけれども、これを本当に整備される考えがあるかについて質問をいたします。

次に、大きい2つ目でございます。

災害時の危機管理BCP（業務継続計画）についてでございます。

東日本大震災や昨年の熊本地震などでは、上下水道 下水道管や水道管、浄化施設などが損壊し、水が出ない、トイレが使えないなど、大変不便で非衛生的な状況に置かれました。BCPは、災害時の被害で、自治体庁舎が損壊したり、職員が出勤できない事態を想定し、行動手順や優先すべき業務を事前に決める、避難所開設などの応急業務と継続すべき通常業務を事前に定めておき、災害時に直ちに対処できるようにする制度でございます。

佐賀県及び佐賀市には、既にBCPはございますけれども、鹿島市にこのBCPを決める計画があるのかどうかについてお尋ねいたします。

ちなみに、全国の中で佐賀県はBCP最下位でございまして、現在、佐賀県と佐賀市だけという状況になっています。

次に、災害時の下水道の利用について質問いたします。

災害時に一番困るのは、トイレの使用だということだそうでございます。鹿島市には既に4,000世帯以上が下水道に接続されているとのことでございますが、下水道の損壊は大変な痛手となります。鹿島の下水道が被災した際のBCP計画があるかどうか、お尋ねいたします。

以上で1回目は終わりでございます。

議長（松尾勝利君）

執行部の答弁を求めます。土井企画財政課長。

企画財政課長（土井正昭君）

私のほうからは、九州新幹線西九州ルートについてお答えをいたします。

平成27年に発生したフリーゲージトレインのふぐあいにより九州新幹線長崎ルートへのフリーゲージトレインの導入がおくれる見込みになったことに伴い、関係6者 関係6者と
いいいますのは、与党整備新幹線建設推進プロジェクトチーム、佐賀県、長崎県、JR九州、

独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、国土交通省鉄道局のそれぞれの長になりますけれども、この6者により、九州新幹線西九州ルートの開業のあり方に係る協議が行われ、平成28年3月29日に合意がなされました。その内容は5項目で、その中の一つで、長崎本線肥前山口 - 諫早間の取り扱いについては、JR九州は経営分離せず、平成34年度の開業時点で上下分離し、3者基本合意が定めるところにかかわらず、JR九州は当該開業時点から3年間は一定水準の列車運行のサービスレベルを維持するとともに、当該開業後23年間運行を維持するということが合意をされました。

この中での一定水準といいますのが、特急列車は、博多 - 肥前鹿島間について、開業時点の需要動向を踏まえて上下14本程度、普通列車は現行水準維持という注釈がついております。この合意により、特急列車については、博多 - 肥前鹿島間の運行で、平成34年度（西暦2022年度）開業から3年間は片道7本程度の上下14本程度の運行、その後、つまり平成37年（西暦2025年度）からは片道5本程度の上下10本程度を運行することになると理解をいたしております。

また、線の構造として非電化にすることについては、平成19年の3者基本合意当時に確認をされていたことであります。今回の6者の合意の中で触れられておりませんので、当初の合意のとおり、非電化、つまりディーゼルカーによる運行を前提に基本合意がなされたもので、今回発生しましたフリーゲージトレインのふぐあいにより、その対応策として、6者基本合意の中でそのことは触れられておりませんので、当初の3社基本合意のままであると理解をいたしております。そのため、今回の状況の変化により合意内容が変わったものではありませんので、このことを契機として、改めて電車による運行を鹿島市から要望をすることは、現在のところは考えていない状況であります。

なお、この間の経緯や佐賀県の対応状況などにつきましては、佐賀県の新幹線・地域交通課から必要に応じて情報をいただいております。議員がおっしゃられたフリーゲージトレインの開発のおくれによる長崎本線への状況の変化も、佐賀県のほうから情報提供により確認をこれまでしてきている状況にあります。

私のほうからは以上です。

議長（松尾勝利君）

岩下都市建設課長。

都市建設課長（岩下善孝君）

私のほうからは、御質問2点目の肥前鹿島駅及び駅前開発について、3点目の市道井手～西葉線の今度の整備状況について、5点目の乙丸～吹上線の整備の可能性について、以上3点を御答弁したいと思います。

まず、2点目の御質問の肥前鹿島駅及び駅前開発についてお答えいたします。

現在行っている肥前鹿島駅、肥前浜駅、肥前七浦駅の再構想の中で、先ほどありましたと

おり、まず肥前鹿島駅が、バリアフリーの整備、あるいはトイレ整備が既に完了いたしまして、次に、来年度は肥前浜駅が、国の地方創生拠点整備交付金の採択を佐賀県で受けられまして、駅舎を1年間で完了する整備を行っていく計画でございます。

御質問の肥前鹿島駅は、第六次総合計画にも記載されておりますように、平成32年度事業着手として基本設計に入らせていただく予定でございます。

ただし、基本設計を行う前のデータ収集といたしまして、昨年度には、利用実態を把握するために、以前、駅前広場の交通量調査を行ったところでございまして、来年度は、住民意向の把握、交通事業者との協議などを予定しまして、平成30年度ごろには、これらのデータをもととした整備に向けての検討を始めるという流れになってまいります。

具体的な全体計画につきましては、新幹線開業に伴う新幹線駅との連携バスの往来や将来利用者数も影響してくるかというふうに考えるために、さまざまな想定は必要でございますけれども、まずは車をスムーズに動かすことは現時点においても大きな課題というふうになっておりますために、ロータリー整備の検討を含めて、駅舎、駅前広場について、全体整備の方策をおさめていきたいというふうに考えております。

次に、御質問3点目の都市計画道路井手～西葉線の今後の整備状況についてお答えしたいと思います。

現在の都市計画道路井手～西葉線は、国道207号バイパスから市街地を通る国道207号線井手入り口、ジョイフルの横でございますけれども、ここから西葉の手前の新方の出口までですけれども、延長で約6,100メートルのうち、肥前鹿島駅前交差点から洋服の青山と東町交差点からアメリカパン前までの合計で約1,000メートルが整備済みでございます。

現在のところ、リンガーハットから東町交差点までの事業を行っておりますけれども、この事業箇所は、西部中学校の自転車の通学路でございまして、朝夕の混雑時には、路肩を通行している状況でございます。また、今後事業予定の藤津碍子近くの付近については、両側の歩道がなく、明倫小学校の通学路として指定されております。

佐賀県では、社会資本整備総合交付金の街路整備交付金事業で、幹線道路の整備や交通安全対策として、歩道がないところの改良を優先的に整備されているところであります。

現在の事業実施箇所は、リンガーハットから東町交差点までの区間でございまして、佐賀県が事業主体で行ってもらっております。この事業内容は、道路の延長420メートル、幅員20メートル、総事業費が約19億円、事業期間で、道路設計、用地測量、用地買収、建物補償までを27年度から33年度まで7年間程度の計画予定であるというふうに県から報告は受けております。

その後は、これらの事業の完了を見据えて、早い箇所では平成32年度ぐらいから道路整備に着工し、35年度を完了目標に計画を今のところ進めていかれる予定であるというふうに聞いております。

このほかの事業箇所といたしましては、高木建設さんの前から神水川橋手前の藤津碍子さんの角までの区間でございまして、事業内容は、片側一部歩道の設置として、歩道の延長を86メートル、幅員2メートル程度で、事業着手は現在のところ来年度からの予定として県から御報告を受けております。

現在、事業を行っているリンガーハットから東町交差点までの区間は、1日当たり約1万7,000台の交通量がございまして、特に朝夕の交通量が多く、自転車通学の安全確保が課題となっております。

また、平成27年度より事業着手はしているものの、国からの予算配分が低く、現在の事業認可の計画と比較いたしますと、事業進捗がおくれている現状でもございます。

また、高木建設さん前から神水川橋までの区間は明倫小学校の通学路ということで、道路の路肩を現在通行されているために、現状の安全対策として、路肩に色をつけた舗装によって車道部との分離表示をしてはおりますけれども、それでも現状危険な状況でございます。

現在の予算確保に向けた対策といたしまして、リンガーハットから東町交差点までの区間は27年度から28年度まで、通常枠で佐賀県から補助金要望を行っていただいておりますが、国費の配分が低かったため、その対策として、国土交通省、警察庁、文部科学省の通達により、平成27年度に鹿島市通学路安全推進連絡協議会を設立して、交通安全プログラムを策定いたしております。そのプログラムに対策必要箇所として位置づけを行って、国費の重点配分事業として来年度の予算要望を行っていただけるように取り組んだところでございます。

佐賀県のほうでも、平成29年度の事業着手に向けて交付金要望を国へ行っていただいているところですが、現在のところ、予算確保ができるかどうかは未定ということで報告を受けております。

今後の対応につきましては、国の予算の内示率次第で事業期間が予定どおりにいかないことも想定はされますけれども、リンガーハットから東町交差点までと高木建設さん前から神水川橋までの2区間につきましては、予算確保ができれば、用地買収、工事内容なども地元説明も伴っていくために、杵藤土木事務所と協力、連携をとりながら早期完成に向けて事業進捗を図っていききたいというふうに思っております。

続いて、御質問の5点目の乙丸～吹上線の整備の可能性についてお答えしたいと思います。

鹿島市都市計画マスタープランでは、今後検討するというふうに記述はいたしております。この路線は、都市計画道路の骨格路線と認識しているところでございます。しかしながら、当該路線が予定されたところは住宅等がかなり張りついておりまして、膨大な事業費等を要することから、財政的な面からも全線の整備は難しいということで、以前の答弁をお答えしておりますし、現在もそのような状況で想定されているところでございます。

今後、市内の交通利便性を考慮いたしまして、一部区間の整備は検討すべきというふうに考えておりますけれども、乙丸～吹上線にかかわらず、今後、長期未着手都市計画道路の見

直しを計画いたしております。

また、これらの課題のある道路について、その方向性に関する調査を行って市民の皆様の意見等を反映しながら、整備をするのか、事業縮減をするのか、廃止をするのか、今後検討していきたいというふうな工程で考えております。

以上でございます。

議長（松尾勝利君）

岸川都市建設課参事。

都市建設課参事（岸川 修君）

私のほうからは、中牟田～御神松線、ハローワーク周辺の整備進捗状況について御説明いたします。

このハローワーク周辺については、前々から渋滞がひどいなど要望を受けていたこともあります。平成27年度には、車がどのように流れているか、どのような対策が考えられるかということ把握するため、現地での交通量や帰宅経路などの調査を平成27年12月8日に実施したところでございます。

具体的な調査内容は、3種類行っております。

その内容といたしましては、1つ目は、ハローワーク周辺の周辺交通交差点での自動車交通量調査、2つ目は、周辺施設への出入りとなる交差点での渋滞の長さをはかる調査、3つ目は、周辺施設から自宅への帰宅する経路調査を実施したところでございます。

この調査の結果から、3つの課題が確認されております。その課題としては、1つ目は、国道207号バイパスと市道中牟田～御神松線との交差点である御神松交差点へのハローワーク周辺施設からの流入交通量が多く、渋滞が発生していること。2つ目は、施設から帰宅経路が南方向へ向かう車が多く、特に市道西牟田1号線、ホームセンターユートク前の市道になりますけど、それと市道新町～神木線に交通量が集中していること。3点目が、市道新町～神木線においては特に道幅が狭く、車同士のすれ違いが困難であり、非常に危険であるという課題が確認されておるところでございます。

この課題の対策といたしましては、御神松交差点の信号表示時間の見直し、ハローワーク周辺の通行規制の見直し、市道新町～神木線の道路拡幅など、幾つかの対策案が考えられております。

これらの対策案を踏まえ、既に御神松交差点においては、昨年度、平成28年2月になりますが、警察のほうで、信号表示時間、青時間の見直しを行っていただいております。

また市としましては、ハローワーク周辺の通行規制、いわゆる交通方向を見直すための社会実験も検討中でございまして、現在、警察の関係機関と協議中でございます。

最後に、この道幅の狭い市道新町～神木線においては、本年度、道幅を広げるためにはどのような形が望ましいのか、概略の検討を行ったところでございます。

今後の予定としましては、平成27年度に工事を行うための実施設計を行い、平成30年度には事業に着手したいと考えているところでございます。

以上でございます。

議長（松尾勝利君）

大代総務課長。

総務課長（大代昌浩君）

災害時の危機管理について、鹿島市にBCPがありますかという御質問にお答えします。

結論から申し上げますと、鹿島市全体に係るBCP、つまり業務継続計画は、まだ策定しておりません。

このBCP（業務継続計画）について簡単に御説明いたしますと、災害が発生した際、市が優先度的に取り組むべき重要な業務を継続し、できる限り短い期間で事業の復旧を図るよう、あらかじめ方針等を定めておく計画であります。また、これとは別に、鹿島市では、鹿島市地域防災計画がございますが、これは鹿島市の地域に係る防災に関し、市、消防署及び防災関係機関が処理すべき事務、または業務の大綱を定め、さらに、市民の役割を明らかにし、災害予防、災害応急対策及び災害復旧、復興について必要な対策の基本を定めたものであります。

一方、BCP（業務継続計画）は、行政そのものも被災した場合を想定した計画となり、人的、物的等の資源に制約がある状況の中において、より実効性を確保するための計画となります。

そこで、BCPを策定する際は、災害の種類や災害発生時の時間帯等、さまざまな状況を想定しての計画としなければならないと考えております。

また、災害の状況によっては、限られた職員数及び資機材などの資源を想定し、効率的に業務を継続しなければなりませんので、そのような制約があることも念頭に入れる必要があります。

なお、昨年4月の熊本地震の際、支援のために鹿島市から多くの職員を現地に派遣しておりますので、実際の現場で何が起こったのか、必要なものは何か、業務の優先順位などを見て体験してきたという、その実績がございます。

策定に当たっては、こういった実体験を生かして、より実効性のあるBCPを策定したいと考えております。

議長（松尾勝利君）

栗林環境下水道課長。

環境下水道課長（栗林雅彦君）

私のほうからは、公共下水道事業の下水道の利用についてということでお答えしたいと思います。

まず、下水道のＢＣＰと申しますのは、大規模な災害、事故、事件等で、職員、庁舎、設備等に相当の被害を受けても優先実施業務を中断させず、たとえ中断しても、許容される時間内に復旧できるようにするため、策定、運用するものであるというふうな理念に基づきまして、鹿島市地域防災計画における災害予防計画の中の防災活動体制の整備における排水対策部、下水道は基本的に排水対策部の部署内に入っております。

その中で、鹿島市災害対策本部要員表の、いわゆる排水対策部長をトップといたしまして、下水道に対してのＢＣＰの計画、簡易なＢＣＰと申しますけど、まだ正式なものはできておりませんけれども、簡易なＢＣＰを作成いたしているものでございます。

とにかく地震や津波などでも、市全体が本当に崩壊してしまうような災害はどうしようもないのでございますけれども、なるべくそういったものに対して、１割でも２割でも、まず、機能を保持しながら、それをどんどん広げていくと、なるべく30時間以内のある程度の機能回復というふうに考えておるところでございます。

現在作成しております簡易なＢＣＰは、国の下水道ＢＣＰ策定マニュアル～第２版～という、地震・津波における地方自治体等のいろいろな策定データが、実際にあったものから拾い上げたものにつきまして、私どもが持つ既存資料を活用して作成いたしましたものでございます。

将来的には全ての事項に合わせまして、下水道のＢＣＰを策定し、実際にそのＢＣＰを使った訓練等も行うべきというふうに考えているところでございます。

以上です。

議長（松尾勝利君）

13番福井正議員。

13番（福井 正君）

ここからは一問一答で質問いたしますけれども、先ほど土井課長、私が聞きました鹿島から博多まで直通で行けるかどうかということについて答弁がありませんでしたけど、そこらあたりを。

議長（松尾勝利君）

土井企画財政課長。

企画財政課長（土井正昭君）

失礼いたしました。

特急列車についてですね、この合意内容からいきますと、博多 - 肥前鹿島間の特急の運行ということになっておりますので、その合意内容によって運行されるものと思っております。なので、当然、その当時言われておりましたので、直通による運行になるものと思っております。

議長（松尾勝利君）

13番福井正議員。

13番（福井 正君）

私が一番心配したのは、本当に博多まで真っすぐ行けるかなと。というのは、ディーゼルカーになるわけですから、ディーゼルの速度と電車の特急の速度、50キロくらい速度差があります。だから、以前言われていたのは、佐世保から来る「みどり」の後ろにつないで行くよという冗談みたいな話があったんですけど、そういうことなのかなと。つまり、ディーゼルで直接博多駅まで行けるのかと。実は、このことによって鹿島の鉄道の利便性というのは全然変わってくるんですよ。直接今みたいに58分で行くのは無理であっても、1時間ちょっとで行ける状態と、また、電車、特急の後ろにつないで行かれるのとは全然イメージも違うし、時間も違いますから、そのことは一回確認をぜひしていただいてほしいんですけど、いかがでしょうか。

実は、以前、この問題があったところ、そこは余り明確じゃなかったんですよ。ですから、ぜひそこを調査していただきたいと思いますけど、いかがですか。

議長（松尾勝利君）

土井企画財政課長。

企画財政課長（土井正昭君）

お答えいたします。

長崎本線の運行に関することについては、佐賀県が今のところ協議の対象者であって、佐賀県のほうで話などをしていただいているところであります。鹿島市は残念ながら、今、関係者というか、当事者になることはできない状況にあります。

そこで、佐賀県との関係が非常に重要になると私どもは考えておりまして、昨年から県議会の一般質問などで取り上げていただいたり、鹿島市のほうからも佐賀県知事のほうへ要望を出しまして、佐賀県の新幹線・地域交通課、ここが主管による長崎本線沿線地域対策等連絡会議など、会議を設置してもらっている状況にあります。

その中で、先ほど議員がおっしゃいましたような、いろんな疑問点とか質問、こちらが確認をしたいことなどは、ここで意見交換などもできる状況にありますので、そこを通じて、先ほど確かに議員がおっしゃいましたように、具体的な特急列車の鹿島駅から博多までの行き方、そういったことも今後確認をさせていただきたいと思います。

議長（松尾勝利君）

13番福井正議員。

13番（福井 正君）

ぜひ確認をしておってください。よろしくお願いします。

次に、肥前鹿島駅……

〔映像モニターにより質問〕

今ちょうど映像が出ております。これはちょっと古いんですけど、6年前の写真でして、エレベーターもトイレもまだできていない状態の写真です。このほうが一番わかりやすいかなと思ってこの写真を使ったんですけども、いわゆるこの部分が駅前でございます、ちょっとここらあたりです。ここら辺を、以前はロータリーにして車を安全に流すという考え方があったわけですけども、先ほどの答弁聞いていますと、まだ何も決まっていないという状態なんですね。それは今からつくられてもいいことなただけですけども、バスツアーというのが最近はやっていまして、私はバスツアーで朝7時ぐらいの出発の便で行くことがあるんですが、そのとき、祐徳自動車以外のバス、観光バスがちょうどこのあたりにとまっています。とまっていまして、ここで、いわゆるお客さんを乗せたりおろしたりもするという、そういうのを何回か目撃したことがございますけれども、そういう関係で、もしここがロータリーをつくるとしたら、そういう作業というのはまず不可能になってくるんじゃないかなと思うんですね。ロータリーも、大型バスが回れるかなという気がしますので、そこら辺の考慮といいますか、ここにバスをとめること自体が違法なんでしょうけど、そういうところもよく考えてね。というのは、その方たち、鹿島出発の方は鹿島に来る方も両方いらっしゃいます。だから、鹿島の観光にとって、ある意味で言ったら一つの結節点になっているという状況もあるんじゃないかなと思うんですね。ですから、そういうことも配慮していただけないかなと思いますけど、今多分初めて聞かれたと思いますので、このことについて何か考え方はございますか。

議長（松尾勝利君）

岩下都市建設課長。

都市建設課長（岩下善孝君）

ただいまの御質問にお答えしたいと思います。

駅前広場につきましては、先ほど答弁いたしまして、福井議員のほうからもありましたとおり、今のところ、都市計画決定を打った、あの広場の範囲内は白紙の状態でございますけれども、昨年度の交通量調査で駅に入ってくる車の動線というのが、大まか1日当たりの数量とか出入りする方向とか、大体確認がとれています。

そういう中で、今ありました観光バス等も含めて、その中にどういうふうにおさめるかというのは、今後、計画を当然行っていきたいと思います。そういう中で、バスをとめるスペースがほかの送り迎えのお車とか、あるいは人の動線等に影響しない範囲で可能であれば、できることもあると思いますけれども、これは来年度以降の検討の中に含めて関係者と調整をしていきたいと思います。

以上です。

議長（松尾勝利君）

13番福井正議員。

13番（福井 正君）

はい、わかりました。

中牟田～御神松線については、これは調査も終わられて平成30年ごろに事業を開始するということをもう一回確認したいんですが、30年ぐらいということでもよろしいですか。今、うなずいていらっしゃるから、それでいいということですね。（「はい」と呼ぶ者あり）はい、わかりました。ぜひお願いしたいと思います。

それから、乙丸～吹上線、ここは私が冒頭申しましたように、非常に住宅が張りついていますし、店舗も張りついている、非常に工事には難航するところだということは私も理解をしています。ただ、鹿島市の南北の交通といたら、やはり吹上の上のほうの2番の欄、あそこまでのちょっとやっぱり大変不便といえますか、狭いところという話があるし、曲がっているところもあるということで、完全につなげるということじゃなくて、少し拡幅ぐらいいはせんといけんとやないかなという気はしているんです。だから、大規模な工事じゃなくて、拡幅して、せめてここは離合するとき、普通車同士だったらちょっとぎりぎりのときがあるんですよ。だから、そういうところを配慮して、少し整理されることもいいかなという気がするんだけど、そこら辺はいかがでしょうか。

議長（松尾勝利君）

岩下都市建設課長。

都市建設課長（岩下善孝君）

お答えいたします。

この乙丸～吹上線につきましては、先ほど答弁のほうで内容を御説明しましたけれども、都市計画道路の骨格路線ということで、現況の道路も含め、重要な路線とは当市の都市計画の内容を詰めたときに認識しているところではございます。そのために市民の方々の利便性とか安全性を向上させることは当然必要ということでございますけれども、福井議員も申されたとおり、全区間というのが財政的には非常に厳しい面があるのが現状です。

しかしながら、先ほど申しましたとおり、整備の必要性は認識しておりますので、財政的に、まずは対応できる範囲で地元の要望とか、あるいは長期未着手、都市計画道路の見直しの中の住民の方々への説明会等で、まずは市民の方々の意向を踏まえて、実態の交通量等の内容を把握しながら、整備の区間及び整備手法は今後の見直し等の中で検討すべき内容だと思っておりますので、来年度以降、そこら辺を含めて確認をとって進めていきたいと思っております。

以上です。

議長（松尾勝利君）

13番福井正議員。

13番（福井 正君）

財政的なこともありますから、なかなか整備は難しいということは私もよく理解はしておりますけれども、鹿島市、特に高津原地区の道路って、本当に走りにくいんですね。

私、今軽自動車に乗っているんですけど、軽だとやっと離合できる。前、普通車乗っていたときは、もう離合できんで、後ろにバックしたりなんたりという、そういうところの道路があっちこちにあります。

特に、きのうあっておりました、杉原議員がおっしゃっていた、いわゆる5差路のところですね、あそこに天神さんが祭ってあるところなんですけど、あそこは本当に怖いですよ。たまたま私の娘たちがあそこに住んでいるもんですからよく行くんですけど、本当にあそこは怖い。だけど、逆に言ったら怖いぐらいが注意して事故が起きんのかなという、そういう箇所もあるのはあるんだけど、だから、ある程度もう少し見通しがいいから、ミラーはあるんだけど、ミラーを見てもわからないときもありますから、そういうところも含めて整備をぜひお願いしたいと思います。

じゃ、次に行きます。BCPでございます。

トイレの問題、私もトイレ、近くなっていますので、トイレは切実な問題でございまして、災害時に、要は避難所、体育館等に避難をしたときに、今、熊本地震のときもそうでしたけれども、いわゆる自分の車の中で寝泊まりをするという状況がありましたよね。というのが、子供さんが泣いたりしたらほかの方に迷惑をかけるとか、それから、トイレは実際使えない状態だったんだけど、トイレに行くとき、外に仮設トイレがあったりして、そこに行くとき人の前を通らんといけんけんが、なかなか行きたくなかったと。トイレに行かないことによって、実は災害時の疾病になる方がかなり多かったということがあります。だから、トイレの問題というのは、災害時に一番最初に考えなければいけない問題だと思います。

それでは、ちょっと映像を出しますけれども……

〔映像モニターにより質問〕

これが国土交通省からいただいたりしよったものなんですけれども、トイレ、これは下が水洗になっています。水洗なんですね。水洗に小さなマンホールつくって、その上に便器を置いて、テントを張って、トイレが使えるようにしているというところでございます、このもう一つ前の状態、多分これが仮設か何かでつくったんでしょうけど、いわゆる小さなマンホールが7つあるんです。ここの上にさっきのテントをかぶせるというやり方です。

現実問題として、例えば鹿島は下水道が破損するというのはあんまり考えられないと思いますけれども、もしあったとしたら、実はこういうことも考えていかなければいけない事態が来るかもしれない。

実際、現実的に、じゃ、どういうことをされたかという、下水道はあるとですよ。下水道があるところは、いわゆる浄化する場所も壊れてしまっているという状況がありました。これはもう関東地震だったですかね、浦安だった、どっちか。そのときにどうしたかという

と、いわゆるこういう仮設をつくるんじゃなくて、もともとある本管のマンホールの上に小さく穴をあけて、その上にトイレを置いてトイレをする。当然流れません。流れないから、それは水の確保も必要なんだけど、そういうふうにして、そこに落とすとして、後でバキュームカーでそれを吸い上げて、ほかの浄化施設に持っていくということをされたそうです。

だから、今から、これが被災したときに、いわゆる鹿島市内の約4,000世帯近くの方たちがトイレが一週間に使えなくなる可能性があるんですね。そうなったときに、やはりそういうことも配慮して、ある程度の用意をしておくことも必要なのかなという気が、私もそれを聞いたときに見たりしたときにそう思いました。

ですから、今後、BCPに取り組む考えがあるとおっしゃったけど、そういうことも含めて、ぜひ考えていただきたいなと思いますけど、今の話を聞いていかがでしょうか。

議長（松尾勝利君）

栗林環境下水道課長。

環境下水道課長（栗林雅彦君）

お答えいたします。

非常にトイレについては切実な問題だというふうに各被災地のほうからもお伺いいたしております。

先ほど言われましたマンホールトイレは、さきの熊本地震においても運用されております。それで、避難者に好評であったというふうに聞いているところでございます。

鹿島市におきましても、今後、設置を検討する必要があるというふうに考えておりますけれども、基本的に水がないと流されないわけですから、これはどうしようもないんですね。ですから、結局はそこにずっとたまってしまふ。先ほど言われたように、業者にバキュームカーでくみ取って、よそのところで処理をしたというふうなことになるという場合もございますけれども、なるべくそういった場合じゃない限りは、水の確保のできる、近くにそういったマンホール、トイレ用のマンホール、それを特別につくらなくてはいけないという形になりますけれども、そういったものの候補地を挙げまして、なるべく水が十分確保できる場所、災害によってどうなるかはわかりませんが、学校のプールの近くとか、あるいは河川のすぐそばとか、こういったものについて検討していきたいというふうに考えております。

ただ、これ自体は、現在の事業認可では下水道事業の補助対象ではございません。ですから、下水道、総合地震対策事業という、一つの全体的なBCPと同じようなものでございまして、地震に対してこういった備えをしていくかという計画をつくり上げていく必要がございます。次回、平成30年度を予定いたしております事業認可変更等のときに、あわせて、整備に必要な諸条件の検討を進めていきたいというふうに考えているところです。

以上です。

議長（松尾勝利君）

13番福井正議員。

13番（福井 正君）

〔映像モニターにより質問〕

インターネットで拾ってきた、これは下水管です。下水管に、いわゆる泥が詰まっていて、いろいろなものが混じっていますね。だから、こういう状態になったときが先ほど出てきた状態なんだと思います。先ほどおっしゃったように、例えば学校のプールの近くにそういう下水管等があったら、そこを使ってそういう作業もできるんじゃないかなとは思いますが、ですから、そういうことも含めて、これは国の補助はないとはわかっていますから、そういう計画だけは常に持っておくということが、実はＢＣＰなんじゃないかなという気がするんです。

だから、ＢＣＰの場合は、いろんな事態を想定せんとはいけません。地震だけじゃないんですよ。鹿島の場合、可能性があるのは、前は水害が必ず１年に３回くらい来るような時期がありました。今は水害はありませんけれども。だから、何が起こるかかわからないのが災害なので、地震に関しては、鹿島の場合、皆さん多分なかろうと安心しとんさっと思えますけど、そうばかりも言っておれん時代になってしまったんですよ。以前は、九州の人たちは意外と災害はなかって思い込んだところがあったんですけど、現実には熊本でああいう地震があるなんて誰も思っていなかったんですよ。ですから、現実問題で起こることを想定しておくということが今から本当に必要なことなんではないかなと思うんです。

その次の質問に行きますけれども、これに対しては職員さんだけでは無理だと思うんです。当然こういう災害が発生したときというのは、職員も被災していらっしゃるし、現場に来られない、役所に来られないという事態も当然想定されるわけですよ。そのとき必要になってくるのは、例えば、市内、市外を含めて業者さんたち、いわゆる下水関係の業者の人たちの手助けを受けないと、実は復旧はできないと私は思いますけれども、その連携状態というのはどういうふうになっておりますでしょうか。

議長（松尾勝利君）

栗林環境下水道課長。

環境下水道課長（栗林雅彦君）

お答えいたします。

これは下水道だけではございまして、全体的に各業者様と災害協定を結んでいるという状態でございます。ですから、こういった状態というものは、ここの写真に写っているのはどうも合流式ではないかと。いわゆる雨水も入る下水道ですね、どうもそういうふうな感じがいたしますけれども、こういったときにどうやるかというのは、もうとにかく全体的な災

害対策ということが前提に参りますので、それとあわせまして、その中での動きという形になっておりますので、そのようにいきたいと思います。

昨年の3月ですか、熊本の震災の際につきまして、震度4の地震が起こったときには、環境下水道課、すぐ集まりまして、全体的な災害対策に、先ほど申しましたBCPの中で、部長を本部長といたしまして、各担当が処理場、それからいろんなポンプ場、それから各種危ないかなと思える管渠のところをずっと回ったところでございます。そういうふうなことで、この簡易BCPでも十分私どもは動いたということでございます。ただ、本格的なBCPをつくるということが大前提かなというふうに考えているところでございます。

以上です。

議長（松尾勝利君）

13番福井正議員。

13番（福井 正君）

これで最後にしますけど、例えば、下水管が被災したと、下水処理場が被災をしたと、そのときにどうするかと。例えば、藤鹿苑のほうにバキュームカーでくみ取って持って行って処理をするということもあり得るのかなという気がしますが、そこら辺はどうですか。

議長（松尾勝利君）

栗林環境下水道課長。

環境下水道課長（栗林雅彦君）

お答えいたします。

鹿島市の公共下水道の処理場が機能不能ということは、あわせまして、藤鹿苑も機能不能になっていると思うんです。ですから、杵藤地区の、いわゆる被害を受けていない処理場に対して、もちろん鹿島市の藤鹿苑が処理ができるということであれば、当然それにこしたことはないわけでございますけれども、その際は、各市町に連絡をとりながら、稼働できる、いわゆる処理施設をお願いをしていくという形になると思います。ただ、藤鹿苑自体には、かなりの処理能力を持っておりますので、3日間ぐらいの処理はできるというふうに聞いております。ただ、あそこは2市1町でつくっておりますので、全部が入ってまいりますので、鹿島市だけのものではございませんので、そこら辺の相互の連携も必要かというふうに考えております。

以上です。

議長（松尾勝利君）

13番福井正議員。

13番（福井 正君）

これは太良町にもそういう処理場をつくられるんですかね。（「あります」と呼ぶ者あり）もうあるんですか。じゃ、太良町との連携というのは、できるということですか。太良

町も災害になっている可能性はありますけどね。（「あります」と呼ぶ者あり）ありますね。
はい。

次に移ります。

では、全体的なＢＣＰについて質問いたします。

ＢＣＰの要素というのはいろいろあるみたいなんですよ。例えば、首長さんが不在の場合の明確な代行を置くということと、それから、職員をどのようにして集めるかという、その手段について、どういうふうなことを考えていらっしゃるでしょうか。

議長（松尾勝利君）

大代総務課長。

総務課長（大代昌浩君）

市長不在の場合の明確な代行準備、それから、職員の参集体制ということですが、鹿島市では、災害が発生し、または発生するおそれがある場合は、災害応急対策を迅速かつ効果的に実施するため、災害の程度、被害の状況に応じ、活動体制を確立します。

災害対策本部の設置決定は市長が行い、その後、直ちに通知、公表するという手順であります。仮に市長が不在、または事故に遭った場合には、副市長、総務部長の順に指揮をとり、指揮命令系統を確立するということになっております。

また、職員の安否確認、それから参集については、総務対策部により必要に応じ、これは電話等により連絡、それから参集をすることになります。

以上でございます。

議長（松尾勝利君）

13番福井正議員。

13番（福井 正君）

職員の参集ということになってきますと、東日本大震災のときも、まず、携帯電話がつながらなくなりましたよね。防災無線はある程度使えたけれども、今私が言ったように屋内設置型じゃないところは、要するによくわからなかった、聞こえなかったというようなこともありました。ですから、最初は呼びかけるときに、例えばメールでされるのか、屋内設置型の防災無線で一斉に流したりするのか、そこら辺はどう考えていらっしゃるでしょうか。

議長（松尾勝利君）

大代総務課長。

総務課長（大代昌浩君）

お答えします。

まず、参集するときの連絡手段ですが、これは携帯とかメールとか、あとは防災行政無線、それから屋内放送のシステム、いろんなツールを使って連絡体制をとりたいと思っておりますけれども、まず職員が安全であるということであれば、すぐに本庁に参集すると

いうことを基本にしておるところでございます。

議長（松尾勝利君）

13番福井正議員。

13番（福井 正君）

はい、わかりました。そういう体制ができているということですね。

次に、本庁舎ですね、いわゆるこの庁舎が使えなくなった場合には、代替庁舎をどうするか。多分、新世紀センターがその役割を果たすんだと思うけど、新世紀センターのスペースで足るのかなと。やはりこの本庁舎もある程度使わんといけんかな。だけど、壊れたらどうしようということも考えんといけんのかなという気がするんですよ。だから、そこら辺のことを考えたことがありますか。

議長（松尾勝利君）

大代総務課長。

総務課長（大代昌浩君）

本庁舎が使用できなくなった場合ということで、壊滅状態になった場合ということを想定して、昨年の8月に新世紀センターを整備したということでございます。この新世紀センターのスペースがこれで十分かということになりますと、程度の問題があるかと思えますけれども、まずはBCPの場合は、必要最低限な部分を業務を継続するというところでございますので、その点は、この新世紀センターで十分ではないかと考えております。本庁舎がどの程度壊滅したかによっても、また変わるかと思っておりますけれども、今の体制でやっていきたいと思っております。

議長（松尾勝利君）

13番福井正議員。

13番（福井 正君）

それから、電気、水、食料の確保ということが次にあります。これは避難者用だけでなく、職員用も含めたということです。だから、例えば、職員の皆さんが夜中に参集してくるときに、水も食料も電気もなかったら、どう活動していいのということになると思うんですよ。だから、今のところは各避難所には避難者用の食料と水は確保してあるということは予算委員会の中で聞きましたけど、じゃ、職員の皆様のためにはどうするのかなという、職員だけじゃなくて、そこは消防隊も来られるだろうし、自主防災組織も来られるだろうし、例えば、よそから警察、自衛隊 自衛隊は自分で賄いますからいいでしょうけど、いろんな組織の方たちが見えることが想定されますが、そのときの電気とか水、食料の確保というのも考えなければいけないと思いますが、そこはどうでしょうか。

議長（松尾勝利君）

大代総務課長。

総務課長（大代昌浩君）

電気とか水、食料等の確保ということでございますが、電気の確保につきましては、庁舎、それから災害対策本部機能を有する新世紀センターについては、自家発電の機能を有しております。ですので、停電後すぐに発電をするということになります。ただし、地区公民館につきましては、そういった避難場所には発電機能は今のところございません。

それから、水や食料につきましては、県と県内の市町により、物資に関する要領というのを定めておりまして、人口の５％を避難者として想定して、備蓄する品目を県と市で役割分担をして定めておるところでございます。

鹿島市では、アルファ米や飲料水、それから毛布などの備蓄品の整備を行っているところでございます。この備蓄数量の中に災害対応要員、つまり職員とか消防団員等を含めた備蓄を計画しているところでございます。

以上です。

議長（松尾勝利君）

13番福井正議員。

13番（福井 正君）

はい、わかりましたけれども、電気ですね、いわゆる非常用発電機、ここの庁舎の１階にあるのを見たことがあります。ただ、新世紀センターはまだ見たことがないんですけど、この発電機は何時間ぐらい発電できますか。今までは、例えば、東日本大震災のときも、病院の非常用発電機も動き出したけれど、24時間程度しか動かなかったと。結果的に手術も何もできなくなってしまったということが前例としてあります。だから、どれぐらいの時間稼働できるのかなということなんですが、そこはどうですか。

議長（松尾勝利君）

大代総務課長。

総務課長（大代昌浩君）

市役所にあります発電機、自家発電機の場合で申し上げますと、これは燃料、重油になりまして、この重油を補給すれば、ある分だけ発電できるということになります。ただ、供給量としては少ないですので、限られた電力を供給するということになりますので、燃料があるだけ補給すれば、いつまでもできるというような体制になっております。

議長（松尾勝利君）

13番福井正議員。

13番（福井 正君）

ガソリンスタンドがあいておればよかですけど、あいとらんときはどがんもされんごとになってしまうわけですよ。やっぱりそこをちゃんと業者の方たちと話ばしとかんといけんのじゃないですかね。それはぜひやっとなってください。

それから、次は災害時にもつながりやすい多様な通信手段 多分、衛星電話のことだろうと思います。鹿島は衛星電話でもあるとですかね。

議長（松尾勝利君）

大代総務課長。

総務課長（大代昌浩君）

お答えします。

鹿島市本庁にはそういった衛星の通信室というのはございませんが、新世紀センターのほうの農林事務所のほうでは整備されておりますので、そこを活用できるんじゃないかと思っております。

議長（松尾勝利君）

13番福井正議員。

13番（福井 正君）

それは重要な行政データのバックアップ、これは杵藤広域の電算事務と、それからクラウドでほかのところともつながっているということですから、多分安全なのかなとは私は思いますけど、うちのは大丈夫ですかね。安全だと思いますか。

議長（松尾勝利君）

大代総務課長。

総務課長（大代昌浩君）

お答えします。

重要なデータといいますと、やはり考えられるのは住基データ等になると思いますが、こういったデータにつきましては杵藤電算センター、それから、構成市町でバックアップ体制をとっているところでありますので、大丈夫かと思っております。

それから、市のデータについて、今、3階のほうに電算室がございますが、本庁の耐震も不安要素がございますので、今、サーバーの更新の際に、耐震の機能が高い新世紀センターのほうに移設を考えているところでございます。

議長（松尾勝利君）

13番福井正議員。

13番（福井 正君）

うちが災害時、非常時に、いわゆる優先業務、何をして何をしないという選択をしなければならない時期が来ると思います。職員数が、これは全員が参加できたらいいんだろうけど、そうでない場合も想定しておかないといけないと思うんですね。だから、優先業務というのをある程度、最初にBCPでは決めておかなければいけないということになっているんです。だから、そういうことも考えていらっしゃるんですか。

議長（松尾勝利君）

大代総務課長。

総務課長（大代昌浩君）

冒頭申し上げましたように、鹿島市の場合は、まだＢＣＰを策定しておりませんが、策定するに当たりましては、まず非常時の優先業務の候補を抽出しまして、それから優先的に開始、再開しなければならない業務を必要性、それから緊急性の観点から直ちに着手すべき業務、これは３日以内に着手すべき業務、それから１週間以内に着手すべき業務、そういった区分をして、非常時優先業務として整理する必要があるかと思います。

具体的には、発災直後でいえば、災害対策本部の立ち上げ、住民の避難の指示、勧告、避難所の開設、それから庁舎を含め各施設の被害状況の把握、それから被害復旧の指示、それから職員及び来客者の安否確認、職員の参集状況の確認、それから庁舎内でのけが人の救助、また、県や警察、消防、他の自治体と関係機関への連絡調整、全庁的な職員の動員及び配備計画、それから水、食料等の配給、情報の収集、記録整理、問い合わせ窓口の設置、それから、広報、報道機関への対応といったものが考えられます。その後、おおむね３日までに、復旧活動の統括、それから応援要員の要請、埋葬業務、廃棄物処理業務、そして、１週間までに罹災証明の発行、戸籍法住民基本台帳に基づく事務、住宅の確保や災害関係経費の予算化などでございます。非常時優先業務を抽出して整理しなければならないというふうに考えております。

議長（松尾勝利君）

13番福井正議員。

13番（福井 正君）

今まで大体７項目ぐらい質問しましたが、ＢＣＰ自体がかなり膨大な量になるんですか。いろんなことを想定しないといけませんから。だから、これは余り私はつくるべきじゃないかと。まだ義務じゃないと思うんですけど、国の方針としては努力義務にはなっていますよね。総務省にしても、内閣府にしても、国土交通省にしても、やりなさい、やりなさいというふうに言っているわけですから、やはり鹿島市としても、こういうことは一応、災害があったらいけないんですけど、あったときにちゃんと機能をするという体制をつくっておかないといけないと思いますから、私はぜひＢＣＰには取り組みをしていただきたいと思います。その次にちょっとだけ質問いたしますけど、災害を想定した訓練、例えば、ＢＣＰだったら職員も全部かかわってきますから、職員含めて、消防団、市防災組織等々との訓練、これは図上訓練でもいいと思うんですよ。そういうことをされることがあるかどうか。

議長（松尾勝利君）

大代総務課長。

総務課長（大代昌浩君）

訓練の予定はということでございますけれども、これまで鹿島市で訓練した経過について

は、まず県の総合防災訓練への参加や、鹿島市でも地域住民と協力して避難所運営訓練などを実施しております。平成26年度には、東部中が完成したときに東部中のほうでやっております。それから、平成27年度では林業体育館のほうでやっております。今年度は自主防災組織の機能強化のため、区長さんを対象に新世紀センターのほうで研修講義、それから、災害があったときの図上訓練を実施したところでございますので、今後もそういった形で、いろんな形で訓練をやっていきいたいというふうに考えております。

議長（松尾勝利君）

13番福井正議員。

13番（福井 正君）

訓練をしているのとしていないのでは、災害時の部分で全然違うそうですね。だから、あそこは岩手県だったかな、津波が来るときにうまく逃げた学校と逃げられなかった学校とあったというのは、やはり訓練の差だと思うんですね。ですから、ある意味で言ったら、自主防災組織の方たちというのは消防団上がりの方が多いのかもわかりませんが、やはりある程度の訓練をしていただいていたほうがいい。だから、自分の地域だけでいいのか、ほかの地域まで行かんといけんのかという、さまざまな状態、事態が生まれてくると思いますから、そういうことも含めて、やはり訓練をしてあったほうがいいんじゃないかなと、私はそう思います。

それから、もう一つ次の質問に行きますけれども、鹿島市でも西原村に職員を派遣して活躍されたと思います。そういう経験があるということは、逆に言ったら、鹿島がほかの自治体の職員の方たちを受け入れる可能性もあるということですよね。そうなったときに、受け入れ体制といたしますか、それは、勝手に来られて何をしてもらおうということはなかなか難しいので、熊本のときも、応援には行ったけど何していいかわからんという事態が結構ありましたよね。だから、鹿島がもしそういった、あったらいけんけど、あったとしたときに、ほかから応援に来られた方たち、これは自衛隊の後、同じだと思うんですけど、そのときにどこを担当してもらって、どういう仕事をしてもらおうということもBCPの中では想定しておかんといけんのじゃないかと思いますが、これについてはどうですか。

議長（松尾勝利君）

大代総務課長。

総務課長（大代昌浩君）

他の自治体の受け入れ体制ということでございますが、現在、鹿島市のほうでは、災害時の応援協定として、近隣の市町、それから県、それから県内の各市町、それから九州市長会、それと千葉県香取市などと協定を結んでおります。国のほうでも協定を結んでおります。非常時には、協定を結んでいる自治体等に応援を必要とする活動内容をまず抽出して、何を必要としているか、そういったことをまずこちらで決めて、応援の受け入れ体制を整えていき

たいと思っておるところでございます。

以上です。

議長（松尾勝利君）

13番福井正議員。

13番（福井 正君）

最後の質問になりますけれども、実は、ＢＣＰは自治体だけじゃないんですよ。いわゆる一般の企業にもＢＣＰの作成が求められています。というのは、災害があったとき、企業が抱えられておる物資も置かないと。だから、それをするためには、実は、普通の会社等にもこれは求められていることでして、災害のときには、要するにそういう会社等の連携というのも当然必要になってくる事態があると思います。ですから、そこも含めて、ぜひＢＣＰに取り組んでいただきたいと思います。最後の質問です。取り組むのか、取り組まないのかだけ教えてください。

議長（松尾勝利君）

大代総務課長。

総務課長（大代昌浩君）

このＢＣＰというのは、災害が発生したときに鹿島市役所が業務継続をいかにうまくやっていくかというような計画でございますので、これは必ずやっていかなければならないことだと思っておりますので、策定を今後していきたいというふうに考えております。

以上です。

議長（松尾勝利君）

13番福井正議員。

13番（福井 正君）

ぜひお願いいたしまして、一般質問を終わります。どうもありがとうございました。

議長（松尾勝利君）

以上で13番議員の質問を終わります。

ここで10分程度休憩します。午後３時から再開します。

午後２時51分 休憩

午後３時 再開

議長（松尾勝利君）

休憩前に引き続き会議を開き、一般質問を続けます。

次に、３番樋口作二議員。

３番（樋口作二君）

皆さんこんにちは。３番議員の樋口作二でございます。本日は、市内小学校全てで卒業式が行われましたが、私も参加させていただき、改めて子供たちの素直さや伸びゆく若い命と

もいいますか、それに触れて感動をいただきました。保護者の皆様の御苦勞に感謝するとともに、卒業する子供たちに心からエールを送りたいというふうに思います。

それでは、通告に従い一般質問をいたします。今回は、不安定な世界状況の中でも、鹿島市民が豊かな心を持って暮らせる社会づくりについて質問したいというふうに思います。

現在の世界状況を見渡しますと、自国の利益だけを声高に主張する大国や、冷静な判断ができるのかと疑われるような国のトップの指導者も相次いで登場したような感じがいたしますし、市民の中にもこれで世界は大丈夫なのかと不安に思っている方もおられます。ＩＳの存在や難民問題、ＥＵの混乱などもいつ終止符が打たれるかとわからないような不安材料も多く存在いたします。日本においてもヘイトスピーチやクレーマーなど、自分の言い分だけを強く言える人がふえ、かつての日本人の誰もが持っていた礼節が薄れてきたような感じがいたします。

そのような中、人類社会が長い苦闘の中でようやく獲得してきた自由とか、平等とか、正義といった人類共通の民主的な権利、また、本日の卒業式で七浦小学校校歌に歌われていましたけれど、清く正しくとか、優しさとか、人の誠までもが後退しているかのように感じるこのごろでございます。

また、新自由主義と言われる世界状況の中で貧富の差が拡大し、2011年、アメリカでは「私たちは99%だ」という運動が盛り上がりました。これは、世界の富豪1%の資産が残りの99%の人を超えていることへの反発でした。しかし、その差はますます拡大を続け、2016年には世界人口のうちの所得の低い人から半分に相当する36億人の総資産と同じ額の富が8人の富豪に集中していることが国際ＮＧＯから発表されました。個人の所得の多いほうから8名と少ないほうから36億人、世界人口の半分の数に当たる人の分が同じということです。驚愕です。驚きました。日本ではそこまでの格差は見られないということですが、子供の貧困という言葉が一般的になってきた今、やはり日本でも格差は疑いもなく存在するということでしょう。

しかし、この不安定で理不尽な世界状況でありますけれども、我々鹿島市民は誇りを持って生活していかなければなりません。今、鹿島市として世界状況をどう捉え、不安のない市民生活を形づくられようとしているのか、市民が安心するような示唆を市長にいただければ幸いです。

次に、世界がどう変わろうと、鹿島市民は特徴ある自然や産物を生かして誇りを持って生活していかなければなりません。今、地方創生が盛んにうたわれ、全国各地である意味競争が始まっている感じがしますが、鹿島だけが特別に経済的に潤うということにはいかないというふうに思います。

そこで、少し発想を転換して、量より質、成長より成熟といった精神的な豊かさや、生活の質の向上を最優先させるような社会のあり方、市民の考えが必要になってくると思います。

「成熟社会」という言葉はイギリスの物理学者でノーベル賞を受賞した高名な方が唱えられた言葉だそうですが、さまざまな解釈がありますので、ここではぎすぎすしない社会、おおらかな人間関係の中で心豊かに暮らせるような社会を成熟社会というふうに考えていきます。そうした成熟社会に当然人類は向かわなければいけないと思いますが、逆走している感もありますので、鹿島市がどう進んだら成熟した社会と言えるのか、お尋ねをいたします。

次に、似たような考えで提唱され、ブータン国で実施されている国民総幸福量で社会を見る政策について、鹿島市で取り入れられる方向がないか、お尋ねをします。

ブータンの国民総幸福量は、4本の柱や9つの指標を示して数値化して評価しておられますが、その中の項目には鹿島市の目指す豊かな社会に向けての参考になる考え方もたくさんあります。ブータンが掲げている国民の幸福度をはかる指標として、心理的な幸福、健康、教育、地域の活力、環境の多様性と活力、時間の使い方とバランス、生活水準、所得等を上げられています。生活水準、所得を下のほうに置かれている考えなど、とても興味深いものもありますので、市の政策に生かせないかどうか教えてください。

さらに、成熟社会には精神的な面で成熟した人物が存在しなければならないと思いますが、かつての日本にはたくさんいたと伝えられる清貧という生き方、清く貧しいですね　という生き方を現在もされているウルグアイ前大統領も、大統領当時からされていたホセ・ムヒカ氏の生き方や存在についてどう考えておられるのか、質問いたします。

最後に、成熟した社会の教育を考えた場合、本当に理想的な子供世界のあり方はどうなのか、大人環境に振り回されない理想的な子供世界についてどういうふうに考えておられるか、質問いたします。

次に、大きな項目として、若年無業者について質問いたします。

地方創生の大きな柱である一つに、ものづくりには特に若い人の力が欠かせないわけですが、さまざまな要因で職についていない方がおられます。全国には200万人を超えとも言われておりますが、特に若者が都会に出て少ない地方都市においては、若者は貴重な宝であり、彼らを働く仲間として迎えることは鹿島市の大きな力になるというふうに思います。

そこで質問ですが、鹿島市には一体どれぐらいの方がおられるのか、そうした方々に対する鹿島市での支援はあるのか、お尋ねいたします。

また、若年無業者の中でも家庭に引きこもってしまっている人には特に丁寧で粘り強い対応が必要かと思います。佐賀県でもひきこもり地域支援センターを設置して対策に乗り出すことが新聞報道されましたが、鹿島市ではどのように取り組んでおられるのか。さらに、今後どのように取り組んでいかれるのか、お尋ねをいたします。

私ごとですけれど、2年目の新米議員が終わろうとしています、鹿島市を穏やかで豊か、そして、人にも自然にも優しいまちにしたいと切に願っております。御答弁どうぞよろしくお願いいたします。

議長（松尾勝利君）

執行部の答弁を求めます。樋口市長。

市長（樋口久俊君）

お答えを申し上げます。

御指名いただきましたので、私が答えたほうがいいだろうと思う分はお答えいたします。ただ、正直言って、いろいろ多岐にわたっていましたので、少しでも時間を頂戴するかもしれません。

御指摘の問題、幾つかありましたけれども、基本的に共通するもの、その考えの中に基盤になるものを考えてみますと、単に質問の中の言葉にありました幸せとか成熟とかということ以上に、もっと大きな、人生とは何かとか、人間は何を目標に生きるのだろうかとか、さらに、日本という国、日本人はどういうふうに生きていくべきかというような、いわば根源的な課題を含んでいるような、そういう問いかけがあったような気がいたします。

そして、逆にこのことは洋の東西を問わず、これまでも、そしてこれからも、ある意味では恐らく人間が直面し続けていく課題でしょう。外国の例も引き合いに出されましたから、それはそれを象徴しているんじゃないかと思います。

極めて難しい問題ではありますが、特に私からは質問の中の2つ、成熟社会というものをめぐって、議論の中心に、鹿島は成熟社会だと思っていいのかどうか、幸せとは何だろうか。これはブータンの例とウルグアイの大統領の例を引き合いに出されましたので、その辺を少しお話をしてみたいと思います。

御質問でもおっしゃいましたが、成熟社会、これはイギリスの高名な学者の方がお使いになった言葉でございます。言葉の印象だけだと一見望ましい、そのこと自体が望ましいように見えますけど、一般的な解釈では、物質的なものの価値よりも精神的な部分に価値を見出そうじゃないかというような考え方があるというふうに理解されておるわけでございまして、そのラインでいいますと、鹿島は成熟社会であるかどうか　なかなか全体的な成熟社会の条件というのは、そもそも言葉としておつくりになったわけで、ルールとか条件は決まっていないんですよ。

そこで、ただそれだけでは議論になりませんので、一例ですけれども、いろんな見方があるとは思いますけど、鹿島市の予算の中の民生費という部分を引き合いにしてお話をしてみたいと思います。

これは、私たちのまちの一般会計の予算の40%を占めようかという状況になっております。額にして50億円に達しようか。比率でいいますと、県内で最高クラスの比率になっている、これはもう議員御承知のとおりだと思います。その数字だけ見ますと、もう既に成熟しているんじゃないかと。鹿島は成熟社会じゃないかというふうにも判断できないわけではないんです。ただ、注意をして分析してみますと、人口は片方減ってきている。であれば、普通は

税金を払う人の数も減っているだろう、税収も減っているだろう、こういうふうに思われるわけなんです。

しかし、この10年を取り上げてみますと、実は税金を負担してもらっている人、お支払いいただいている人、サラリーマンの皆さんが中心の数でございますけれども、実は減らないんですよ。市税の額は いわば市の収入ですね は安定をして、昨年でいえば増加をいたしております。

これはどういうことを意味するか。細かい分析も必要かもしれませんが、さっきの提案でございました成熟という点に限って言えば、成熟前のまだかすかですけれども、成長している段階ではないかと、そういうふうな段階にあるんじゃないかと言っていいと思います。有効求人倍率もこれまでにない水準にあることや、あわせて考えますと、鹿島はもう少し成長の方向に、少なくとも羅針盤といたしますか、そっちは向いているんじゃないかというふうに見ていいと思います。もちろん違った見方もあるかもしれませんがね。

逆に言いますと、福祉関係の負担はこれからまだまだ重たくなります。当然民生費の負担は重くなる可能性はございます。一番の問題は、誰がどのような形でこれを負担していくかということが課題になるわけです。一番楽なのは、国にお願いしますと言えという話が一番楽かもしれませんが、現実問題として、国自体はあえいでいるわけですから、大丈夫かなと。私たちのまちも自分たちのまちでこの段階でできるだけ成長しておかないと、二重の意味で財源手当てがつかなくなるということがあり得ると思います。

そう考えていくと、全く質問の中でおっしゃったように、格差と貧困ということが次にひょっとしたら縮まらないで大きくなるのかもしれないねということがあり得るわけです。これは鹿島だけじゃございません。日本中、むしろ世界中そうなっているかもしれないんですよ。したがって、わからないですけど、頭の体操だけで言いますと、格差を縮小するとなれば、一番単純なのは所得の移転、税金で処理する、たくさん持っている人から税金で取り上げる、持っていない人には税金をつぎ込むと、これは頭の体操なんですけど、そう簡単には現実問題いかないよ。

そこで、格差を縮めるのを具体的にどうするか。もう一つ頭の体操しておりますと、格差があるんだったら、縮める方法としていろいろありますが、非常に割り切って言えば2つなんですよ。下へそろえる、つまり、みんな一緒に我慢しましょうと。そうすると格差はなくなります。しかし、地域が限られていますと、余裕のある市民の皆さんは、こんなところにやっていられないよというんで出ていくということになります。そうすると、その人たちが本当は負担をしてくれているんですよ。その人が出ていくと、さらにまた、同じ現象が起きてくる。これは昔の物品税という考え方がこういう考え方に立っていたんですよ。金を使う人から税金かけて取りましょう、これは今なくなっております。

じゃもう一つ、みんなを上へそろえるか、いわば北欧型と言ってもいいかと思えますけれ

ども、そうすると、今度は膨大な原資をどうやって調達するかという話になるわけです。結局、非常にぐるぐる回ってくる。それを今解決している。完全な解決ではございませんが、1つが税金の移転という方法で何とかやっているということではないかと思っております。そうしますと、結果の平等ではなくて、平等の条件をなるべくそろえるようにして、その中で競争して、頑張っ、て、メリットを取った人からは頂戴して、それをそうじゃない人で分配すると、これが今基本的に世界中考えられている、成長して所得があったところから分配するようにしましょうという考え方ですね。そういう理屈っぽいことはやめにしますと。

税金でもう一つ、累進課税という考え方がこれに一番近いわけです。例えば、水道料金でもこれはたまに議論になりますけれども、同じ1リットルなら1リットルの水でも同じじゃないんですよね。たくさん使う人から高い金を頂戴しましょう、逓増法という形をとっておりまして、たくさん使う人がたくさん払ってくださいと。それは量じゃないんです。単位当たりたくさん払ってくださいと、こうなっているんです。

一方で、今度は負担できない人には軽減措置というものを盛り込んでおりまして、つまり、公平負担というのをこういう形でやっていくということですが、正直決め手はございません。いろんなやり方を世界中やっています。私たちのまちというか、日本で今一番関心を持たれているのは、実務的には消費税がどうなるだろう、ここの見通しがつかないと、この議論の一つの階段が上がれないというようなことでございます。

それでは、近隣のまちと比べてどうだろうか。成熟という感覚、観点から見ますと、そうすると、精神的な満足度というのは、物質的な満足度がなければ、少しおっしゃいましたけど、「衣食足りて礼節を知る」という言葉がございましたから、そう言いますと、公共施設の充実度が一つの尺度になるとすれば、周辺とは少し道路、住宅が不備じゃないかなという判断をいたしております。仮に成熟していれば、福祉の財源をそこから自主的に生み出すという形で、経済成長がある程度達成されていないと財政運営は難しい。そうしないと、また緊縮財政に戻ってしまうという不安がありますから、我々はそこをを考えておかないといけないと。

そこで、ある意味で問題であります、もし仮に成熟していると見る。そうすると、ハンドルを切りかえるというのがおっしゃったような意見だと思いますね。鹿島らしさを出せと。ただ、ずっと延々お話ししておりましたけれども、緊縮財政に達していない段階でハンドルを切りかえますと、また緊縮、あるいは縮小均衡の道へ逆戻りする可能性が極めて強いと思っております。格差と貧困があるとしても、さらにそれが広がるんじゃないか、その心配をいたしております。

したがって、私がしばしばこういう立場でもお話をしていますが、この7年間、「コンクリートも人も」と言ってきたのはまだそこにございまして、そういう考え方で完全に「コンクリートから人」という段階には至っていないというのが成熟という意味での考え方でござ

いました。十分説明し切っていないですが、成熟社会というのはそういうふうを考えているということをお話しておきたいと思います。

次に、幸せとは何だろうかというお話がございました。これこそ冒頭に申し上げました難問、多分正解はないんだと思いますね。どんなにお金があっても満足しない人がいるんですよね。これはもう御承知のとおりだと思います。

それから、清貧を旨として置かれた場所で自分の花を咲かせるというような人もおられます。どちらが幸せな人生を送ったかというのは、他人が判断する話じゃないんだろーと思います。今いろんな大学でも、特にハーバードなんか80年近くこの問題を追求しているんですけども、昔の哲学者の話を含めて答えはばらばらなんですよ。

だから、無理してまとめてみますと、人の幸せはおおむね3つに集約されるだろうという話になっております。もちろん違った考えもありますが、1つは健康であること。健康でない人は、幾らお金を払っても健康になりたいと言う人はいますから、説明は要らないと思います。2つ目が、愛を感じることでできる日々を送っているかというのが2つ目になっております。3つ目が楽しく過ごせる仲間が周囲にいるか。そういうことが通用するとしますと、経済力がなくてもブータンは幸せな国だろうという判断、それから、ウルグアイの大統領の生き方、これも納得がいくと。ただ、これを何か条件みたいなのをつくって、基準をつくって、みんなこれでいきましょうというのは、これはなかなか容易なことではないという気が正直言っていたしております。なぜかと。もともと人間は自由な生き物でございますし、敗北より勝利を好むという性格をほかの動物と同じように持っております。そして、私自身もそうなんです、なるべく楽な道を歩きたいということを選ぶことが多いと言われておりますので、ルールとして持ち込むというのは難しいかなと。

ただ、1つだけ注意をしておいていただいたほうがいいと思いますが、ブータンもウルグアイも光の部分はその判断をみんないたしておりますけれども、正直やっぱり影の部分もございまして、これは議員も御承知だと思います。麻薬とか、犯罪とか、部族の紛争というのを内部に抱えております。非常に悩みを持っておられるということも我々は承知しておいたほうがいいと思います。

そこで、最後の質問だと思いますが、理想的な子ども・子育てだろうと、これもまた理想というのは非常に歴史と伝統とかあると思いますが、1つだけ御紹介をさせていただいて答弁にしたいと思います。

ことしの1月末ごろだったと思います。NHKのテレビでスペシャル番組で「ママたちが非常事態!？」という放送がございました。ごらんになった方はおられるかもしれませんが、人間、特に日本人のママたちが失ったものという立場でまとめ上げられた、私自身の判断で非常にいい番組だったと思います。そこはアフリカのカメルーンという土地の奥地でございまして、バカ族、バカ族てばかという意味じゃないですよ。名前がバカ族という人たちがお

られまして、その子育てが心に残りました。恐らくああいう土地ですから、ずっと昔、太古の昔からそういう子育てをしてみえたんだと思います、受け継がれたやり方。

簡単に申し上げてみますと、部族の幼い子供たちをみんなで共同保育するんですよ。手のすいた女の人がおむつを取りかえたり、あやしてくれたり、それから、他人の子供でも泣いていたらお乳をふくませるというような部族がございまして、普通にやっているんですね。そうすると、お母さんが出かけるときに安心して外に行けるし、子供たちは、そこに少なくとも部族に属している限りは差別なく成長していくと。したがって、子供たちが5人、6人当たり前、中には10人くらい産んでおられると。何かいつか我々の国もあったような状況が実現をされておりました。

自分の子供を丁寧に少なく産んで育てる我が国とは対極にあるなという印象を受けたわけでございまして、どちらが適当か、これも課題だと思います。でも、そういう方法で人類は人口をふやしてきたという推測をいたしますと、ぐっと飛んで結論から言いますと、待機児童がゼロという方法はいろんなやり方があるかなと。だから、余りそのことだけを政策目的みたいに上げるとするのは余りいいんじゃないかなという気がいたしました。

それから、その中でみんなの、たしか一言だけ質問があったと思いますが、幸せかどうかというような質問があったときに、人のせいにしていないんですよ。だから、ああ、これはみんなで共同してしょってられるなという印象を持ちました。このことを御紹介させていただいて、子供たちの育て方の参考にしていただければと思います。ありがとうございました。

議長（松尾勝利君）

答弁まだありますか。橋村福祉課長。

福祉課長（橋村直子君）

私からは若年無業者とひきこもり者についてお答えします。

まず、内閣府の若年無業者の定義は、高校や大学などの学校及び予備校、専修学校などに進学しておらず、配偶者のいない独身者であり、ふだん収入を伴う仕事をしていない15歳以上34歳以下の個人としています。

さらに無業者を、就業希望を表明し、かつ就職活動を行っている求職型と、就業希望を表明していながら就職活動は行っていない非求職型、就職希望を表明していない非希望型の3つに分類しています。求職型は、総務省統計局の労働力調査で調査されており、完全失業者に類似した概念としています。

一方、通学も仕事もしておらず、職業訓練も受けていない人々、いわゆるニートは、非求職型及び非希望の無業者として日本では通常理解されていると思われます。

総務省の調査によれば、1992年の若年無業者は130万人であったのが、10年後の2002年には約80万人ふえて213万人となり、約1.6倍ふえています。この213万人は、15歳以上34歳以

下の全人口3,400万人の6.3%に当たります。また213万人の内訳は、求職型128万人、非求職型43万人、非希望型42万人でございます。

佐賀県や鹿島市の詳しい数字はございません。

鹿島市の若年無業者への取り組みについてですが、福祉課には家庭児童相談員や母子相談員、DV相談員、障害者相談員、就労支援員を配置し各種相談を受けており、子育て支援センターや広場も育児、家庭、家族の相談などを受けております。

福祉課への相談は多様で、複合的な課題を有しているため、各相談員の連携は必要不可欠であり、統括的に対応している状況でございます。昨日も申し上げましたが、保育所や学校、保健センター、民生児童委員や区長さん、地域の方々から無業者などの情報提供により、さまざまな支援を行っています。しかし、15歳以上で何らかの学校に行っていない児童や、18歳以上で何らかの機関に所属していない者については情報が得られにくく、どこが把握するのか、どう対処すべきか悩ましいところでございます。

福祉課が実際に対応した事例を紹介しますが、デリケートな内容なのでぼかして話します。

まず、高校を中退している男児の母子家庭に対し、母子相談員が親子関係や生活面がかかわっていました。そのうちに高校中退で家に引きこもっている男児に家庭児童相談員が声を試みたところ、将来的な就職や自立の意向を見出し、定時制高校進学 of 気持ちを持っていることを確認。相談員が受験対策の学習支援に行ったり、進学の準備や面接動向など細部にわたり手を差し伸べ、結果、定時制高校に通いながら働き、また生活面も自活の道が見えたところでございます。この間かかわったのは2人の相談員だけでなく、ほかの相談員や社会福祉協議会と福祉課の職員も多数かかわっており、今も支援は続いております。

また、高校に進学せず家に引きこもっている児童の家族からの相談に対し、社会福祉協議会の生活困窮者自立支援センターの職員が何度となく足を運び、さまざまな情報提供、声をかけるうちに徐々に外に出ようになり、こちらも高校進学を目指すことになり、これから社会に出る準備を進めているところでございます。

このほか、家族との折り合いが悪い家庭環境の児童への助言や支援、障害を持つ若者の住居探しや就労支援など、情報を入手した場合は、その者に合った方策をとっているところでございます。

福祉課の就労支援の今年度2月末の実績は、支援数は30件、うち生活保護世帯16世帯の支援で、就労による収入増が12世帯、生活保護廃止が2世帯でございました。母子世帯は4世帯の支援に対し、就労は4世帯全てであり、また、困窮世帯8世帯中、5世帯が就労につながっております。

次に、鹿島市のひきこもり者への対応についてお答えします。

まず、ひきこもりの定義についてですが、厚生労働省によると、仕事や学校に行かず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせずに、6カ月以上続けて自宅に引きこもっている状態、

時々買い物などで外出することもあるという場合もひきこもりに含めることになっております。

先月、佐賀県障害福祉課から民生児童委員へ、平成29年1月現在のひきこもりに関する調査の依頼があり、本日、回収が完了し、県へ提出したところでございます。

調査目的は、県でひきこもりに特化した相談機関、ひきこもり地域支援センターの設置を検討しており、設置の基礎資料とするためになっていきます。

調査内容は、おおむね15歳以上の方で、社会的参加ができていない状態が6カ月以上続いていて自宅に引きこもっている状態、それと、社会的参加ができない状態であるが、時々買い物などで外出することがある方、3つ目に、ひきこもりであるか判断が難しい場合、民生児童委員として何らかの支援が必要と感じる方を上げるようになっております。記入方法は、担当地区に3要件に該当する方がいるかいないか、いる場合は最大3つ記載できる該当者欄があり、詳細を記入するようになっていきます。

この調査を集計した結果を紹介します。

調査は、民生委員・児童委員96人に実施し、うち56枚の回収でしたので、残る40枚は該当者なしと思われます。そして、ひきこもりと思われる方が「いる」の回答は23枚あり、ひきこもりの人数は33人、うち男性は21人、女性は8人、不明4人。また、年齢構成は10歳代3人、20歳代3人、30歳代6人、40歳代7人、50歳代9人、60歳以上が5人でした。

ほかにも生活保護係に相談に来られた方の状況で見ますと、平成27年度は相談人数72人中、保護開始33人、ひきこもり状態にある者5人、本年度は2月末現在で81人の相談があり、30人の保護を開始、ひきこもり状態は11人でした。

生活困窮者自立支援事業における相談状況、これは社会福祉協議会に委託しておりますが、一緒に活動しております。これの27年度からこれまでの2年間の延べ件数が相談112件、ひきこもりが20人。内訳は、10歳代4人、20歳代2人、30歳代3人、40歳代5人、50歳代4人、60歳以上2人です。20人のひきこもりの中で解消できたのは6人であり、高校入学が1人、就労開始が4人、施設入所が1人でございます。

鹿島市の生活困窮者自立支援事業における支援の主なものは、就労支援、家計相談、フードバンク提供でもあり、具体的には、定期訪問やハローワーク、法律事務所、病院などへ同行支援、あとパソコン指導や学習支援なども行っております。

また、ひきこもりの相談窓口として紹介しているのが佐賀若者サポートステーションや精神保健福祉センター、杵藤地区保健福祉事務所などの心の相談、あと友朋会嬉野温泉病院などでございますが、今後、佐賀県のほうで地域支援センターができたときには、そちらのほうと連携していくことになるかと思っております。

以上です。

議長（松尾勝利君）

3 番樋口作二議員。

3 番（樋口作二君）

市長、それから丁寧なお答えありがとうございました。

まずは市長がお答えいただいた成熟社会に向けての件ですが、ある意味、経済的な面は当然行政としては確立していかなければいけない、それはもうわかっていることですが、それ以外に、そういうことをやりながらでも、何とかもう少し世の中の状況から見て、穏やかな心とか、前向きな考えを持つとか、分別ある思料とか、そういうのがどうも持ちにくいような環境もあるのかなと思って質問をいたしたところでございました。経済的にも余りにも格差がひどいというのは意欲をなくすような状況もあるし、そういうことの意味の中でも、やっぱり私たちが、要するに鹿島市民としてのつながりを持って世界を見詰めながらも、日々地元が明るくなるような行動をする、そういうふうな鹿島市をつくっていくことが必要だと思っておりましたので質問したところでしたけれども、市長には引き続き、市民が力づけられるようなリーダーシップをとっていただくようよろしくお願いします。

内容について、できれば市長以外の方に少し御答弁いただきたいのですが、例えばブータンの国民総幸福量、先ほど幸福論とか大分伺いましたけれど、一番最初に、ブータンでは、ブータンにいる国民が幸せかどうかというのを聞いているわけですが、例えば鹿島市に住んでいる市民が心理的な幸福をどういうふうに考えているのか、そういうのがアンケート等から見えてくるものがあるかどうか、どういうふうに思っているのか、そういうふうな資料があるのかどうか、どういうふうに鹿島市民は思っていると思っておられるのか、御答弁よろしくお願いします。

議長（松尾勝利君）

土井企画財政課長。

企画財政課長（土井正昭君）

お答えいたします。

少し趣旨が違ってもわかりませんが、市民アンケートという形では、第六次鹿島市総合計画を策定する際に、現在の鹿島をどう思っているのかとか、将来の鹿島にどのようになってほしいかというようなテーマを掲げて調査を行っているところであります。

そういった中で、鹿島に住んでいいと思う点とか、鹿島に住んでいて不満に思っている点、そういったものと、各施策ですね、鹿島市が行う取り組みについて満足をいただいているのか、それとも不満なのか、どんなところに力を入れていただきたいとか、そういった第五次から第六次にかけて同じようなアンケートを行うことで、今市民の方が満足をいただいているのか、それから、どんなことに力を入れていただきたいとお考えなのかなどはアンケートとしていただいている状況にあります。

あとその際には、例えば子供たちにはこんな鹿島になったらいいなとかいう作文を書いて

いただくとか、鹿島市の将来を担う子供たちですね、中学生とか高校生とは意見交換をして、鹿島市がどんな鹿島市であればとか、そういったことのお話は意見交換でさせていただいている状況にあります。

以上です。

議長（松尾勝利君）

3 番樋口作二議員。

3 番（樋口作二君）

私もこの第六次総合計画のアンケート調査を見させていただきまして、やっぱりみんな鹿島市が好きなんですよ。というのが、できたら何とかしたいというふうなことまで当然見られてくるわけですけど、好きということはある意味幸せだというふうに思っていると思いますので、そういう幸福度という視点から要するに市民を見るというか、そういう視点も必要かなということで提案をしたところでございますけれど、私個人的に申せば、海あり山ありの自然環境で、里には豊かに作物が実り、干潟にはウナギもやってくるような土地で、それから、人とのつながりもとても深く、幸せに過ごしておりますし、多分同じように思っている方がたくさんおられると思いますので、そういう意味からも、いろんなものを大切にしていかなければいけないというふうに思っているところです。

もう一つちょっとお尋ねしたいのは、ブータンの国民総幸福量の考えの中に、地域の活力というふうなことがいわゆる国民の幸福の一つだというふうに捉えられておりますけれど、この地域の活力というのが、例えば昔と比べてどういうふうになっているのかという部分、どういうふうに感じておられるのかということをお答えをお願いしたいと思います。

議長（松尾勝利君）

打上市民部長。

市民部長（打上俊雄君）

それでは、私の守備範囲であります民生部門から見た地域の活力という点で若干お話をさせていただきます。

今、鹿島市の高齢化率が間もなく30%を超えようとしております。そういったことで、鹿島市の活力を維持してまちづくりを進めていくためには、この65歳以上の高齢者のエネルギーの活用が不可欠であります。そういった意味で、65歳以上の方ですね、支えられる側だけではなくて、元気な方を鹿島市のまちづくりを支えるほうに回っていただく、これが鹿島市にとっては今から非常に大変重要な課題であります。そういった意味で、学んでもらいたいということでもあります。

これは佐賀県の高齢者大学、ゆめさが大学とか、老人クラブ連合会とか、老人会とかあります。その中で、ゆめさが大学の学校長が佐賀県知事であります。この佐賀県知事がよく入学式、卒業式で言われることなんです、高齢者も学んでもらいたい。ただ、この学ぶとい

うことは、小学校、中学校とか高校の義務教育とは全然意味が違う。というのは、高齢者が学ぶということは、物知りになるために学ぶのではないと。学んで、それを地域のため、家族のために生かすために学んだということですね。そういったことを言われております。これは非常にいい言葉だというふうに私も思っております。

ということで、高齢者の方も大いに学んで、大いにまちづくりに参加していただいて、そういったことで、高齢化社会をマイナス面だけじゃなくて、高齢者に活躍していただきたい。そういったことで、鹿島市のまちづくり、鹿島市の活力が維持できて、いいまちができるといふふうに考えております。

以上です。

議長（松尾勝利君）

3 番樋口作二議員。

3 番（樋口作二君）

ありがとうございました。

高齢者に視点を当ててお話をいただきましたけれど、私はもちろん高齢者が元気というのは、私自身もそうですから何となくわかるところもあるわけですが、例えばこの前、市民部長からいただいた資料ですけど、先ほどもお話しされましたけれど、昭和30年に人口が3万9,392人あったときに、世帯数は7,076戸、1世帯が5.6人なんですよ。5.6人ということでした。平成27年の統計によると、人口は3万人を切っているのに、世帯数はふえて1万124戸、1世帯の人数が2.9人というふうなことで核家族化が進んでいるということですが、この地域の活力といいますか、その一つのもとがやっぱり家族の活力といいますか、そういうことも考えられるのかなと思って、家族の数が減るということは、ある意味家族の力としては弱くなっているのかなというふうなことも考えられないことないのかなというふうに私は思います。

市議会の中の地方創生特別委員会でも、子供たちの成長には3世代同居が非常に大切であるとの話し合いをしてきましたけれども、地域の活力のためにも地元に残って活躍する若者が、できれば世代を超えた文化の相続という意味でも、3世代同居などをして受け継いでいくというのが地域の活力につながってくるのではないかなというふうに思います。

私は七浦地区に住んでおりますので感じることでありますが、地方創生は東京の一極集中解消という意味もあるというふうなことですが、同じようなことは鹿島市でも起きており、鹿島地区の方が七浦に住まわれることはまずほとんどないわけですが、我々のような者が鹿島地区に出かけるというのはよくありまして、まちっ子といいますか、こちらのほうへの一極集中も進んでいるのではないかと思い、地方創生を考えるならば、鹿島市全体の活力という意味からも取り組みが必要かなというふうに思ったりしているところですが、これについては私の思いを述べるにいたしまして、終わらせていただきたいというふうに思

います。

もう一点、先ほどブータンやウルグアイは国内的な問題も抱えて、それはもうウルグアイに実際ラムサルで行かれた副市長とか部長とかもおられますので、非常に治安が大変だったというふうな話も聞いていまして、そういう国柄かなというふうに思いますけれど、ウルグアイ前大統領が名言を幾つか言っておられますけれど、例えば、貧乏な人とは少ししか物を持っていない人ではなく、無限の欲があり、幾らあっても満足しない人のことだとか、そういうふうな、要するに精神的なことを述べておられまして、それについて、いわゆる経済発展を追い求める政策が進められてきているわけですが、それは人を幸福にするとは限らないと言われているような気がいたします。我々もやっぱりこういう世界の偉人といいますが、そういうことに耳を傾けて、できれば教育行政の片隅にでも置いていただく必要があるのかなとも思います。

教育のことをちょっと質問して、教育委員会のほうにもお尋ねをいたしましたので、教育委員会としてそういう思いといいますか、成熟した社会といいますか、理想的な教育といいますか、そういうところについてどういうふうな思いを持っているのか、御答弁のほどをよろしく願いいたします。

議長（松尾勝利君）

染川教育次長。

教育次長（染川康輔君）

お答えします。

成熟社会における子供たちのあり方といった非常にスケール感の大きい質問でございますけれども、一つ参考ということでよろしいかなと思いますが、一つ、次期学習指導要領の改定に当たり、昨年12月に中央教育審議会の答申の中で、成熟社会に移行していく中での学校教育が目指すべき子供の姿と社会が求める人材像の関係について述べられている部分がありますので、御紹介したいと思います。

「学校教育が目指す子供たちの姿と、社会が求める人材像の関係については、長年議論が続けられてきた。社会や産業の構造が変化し、質的な豊かさが成長を支える成熟社会に移行していく中で、特定の既存組織のこれまでの在り方を前提としてどのように生きるかだけではなく、様々な情報や出来事を受け止め、主体的に判断しながら、自分を社会の中でどのように位置付け、社会をどう描くかを考え、他者と一緒に生き、課題を解決していくための力」の育成が社会的な要請となっていると述べられております。

また、その上で、子供たちが成熟社会において新たな価値を創造していくための手だてとして、次のように述べられております。「子供たち一人一人は、多様な可能性を持った存在であり、多様な教育的ニーズを持っている。成熟社会において新たな価値を創造していくためには、一人一人が互いの異なる背景を尊重し、それぞれが多様な経験を重ねながら、様々

な得意分野の能力を伸ばしていくことが、これまで以上に強く求められる。一方で、苦手な分野を克服しながら、社会で生きていくために必要となる力をバランスよく身に付けていくことも重要である。」と述べられているところでございます。

鹿島市教育委員会が掲げる子供のあり方についても、中教審の答申同様、次代を担う子供たちの姿や育て方について目指すべき方針を定めているところでございます。昨年4月から第六次総合計画の計画期間とあわせて策定した鹿島市子ども教育大綱においては、次代を担う子供たちの理想とする姿についての目標の中で、「心と体そして学力について調和のとれた成長と、その過程の中で個性を見だし、その個性を磨く。」と掲げております。また鹿島市学校教育方針の中では、「21世紀を主体的に生きることができる心と体、そして確かな学力について調和のとれた人間性豊かな子どもたちの育成という観点に立ち」、学校教育を推進することを掲げております。

いずれの方針も学校教育が長年その育成を目指していた変化の激しい社会を生きるために必要な力である生きる力や、その中でこれまでも重視されていた知・徳・体の育成を踏襲したものでございますが、予測困難な時代の変化の中で未来を生き抜いていくための力の基盤は、学校教育における継続性の中で生まれてくるものであると考えているところでございます。

以上でございます。

議長（松尾勝利君）

3 番樋口作二議員。

3 番（樋口作二君）

来年度から新しく学習指導要領が小学校に入るというふうなことも伺っておりますけれど、実は来年は明治維新150年ということでいろいろな取り組みが計画されています。その当時の子供たちはどういう環境にあったのかというのが、そういうことは民族的な分野ですからなかなかわからなかったんですけど、江戸末期から明治初期の子供の様子を開国直後に訪れた外国人が観察した書物等も今出ているところですけど、それを読んでおりまして非常に感動を受けました。

どういう状況か二、三読ませていただきますと、日本の子どもは少し大きくなると外へ出され、遊び友達にまじって朝から晩まで通りで転げ回っている。私は日本が子供の天国であることを繰り返さざるを得ない。世界中で日本ほど子供が親切に取り扱われ、そして子供のために深い注意が払われている国はない。にこにこしているところから判断すると、子供たちは朝から晩まで幸福であるらしい。彼らに注がれる愛情は、ただただ温かさと平和で彼らを包み込み、その性格の悪いところを抑え、あらゆるよいところを伸ばすように思われます。日本の子供は決しておびえからうそを言ったり過ちを隠したりはしません。青天白日の如く嬉しいことも悲しいことも隠さず父や母に話し、一緒に喜んで癒やしてもらったりするので

す。

そういうふうな子供環境、親子環境といいますか を述べられておりまして、この時代の子供は、日本は子供の楽園であると言っておりますが、果たして150年間の進歩の中で、現在の子供たちの置かれている状況は、より進んだ子供環境にあると言えるのかというあたりが非常に気になっているところでございます。

単純に子供を、方言で言いますと、むぞうがると言いますね。子ば、むぞうがいよっかにゃとかですね、そういうふうな子供に対する大人の姿勢といいますか、そういったところが果たしてどういうふうなのかといったあたりも、これは学校の中でもなかなか取り組むことが難しいのかなというふうに思いますけれど、考えていかなくتهはいけないのかなというふうに思うところでございます。

ひょっとして、目指すべき未来は過去にあるのではないかなとか、そういうことも思ったりしているようですので、できれば教育行政でも少し何か取り入れていただければというふうに思うところであります。何かコメントはございますでしょうか。

議長（松尾勝利君）

江島教育長。

教育長（江島秀隆君）

コメントをとということでございましたので、的が外れるかもわかりませんが、お話をさせていただきます。

まず、きょうは各小学校の卒業式ということで、議員さん方にも参列いただきましてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

私は七浦小学校のほうに行かせていただきまして、子供たちが卒業証書进行うときに、みんなのほうを向いて、僕は、私は将来こういったことをやりたいですと、あるいはこういった人になりたいですというようなことを一人一人が非常に元気よくはきはきと言ってくれました。本当にすばらしい卒業式だったなと思っております。

そしてまた、行ったときに校長室のほうで、今回、つくられた卒業アルバムというものを見せていただきまして、その中に全員が西日本読書感想画コンクールで入賞をしたと、全員がです。そして、一面に全員の感想画が写真で撮ってありました。本当にすばらしい子供たちだなというのを思ったんですね。もちろん、子供たちも頑張ったわけで、やっぱり学校の先生もしっかりと力を入れていただいたんだなということを思いました。

そしてまた、子供たちが退場をするときに、今度は保護者の方に向かってお礼を言っておりました。これは全員で手分けして言っておりましたけれども、これもまたすばらしく、やはり皆さんも思わず拍手をしていただきました。

やっぱりそのとき思ったんですけど、拍手というのはいいですね。やっぱりいいなと思ったときには拍手をしてあげなくちゃいけないなと思います。今後も卒業式、入学式が春には

行われますけれども、本当に皆さんが温かい気持ちで入学式を迎えられるように、子供たちが温かい気持ちで迎えられるように、みんなで準備をしていきたいというふうに思っております。

ちょっとつけ加えさせていただきますけれども、実は先日、もし時間があれば御紹介しようかと思ったことがございまして、子供たちが本当によく頑張ってくれているというのがございます。皆さん方ももう御存じだとは思いますが、昨年、鹿島市の子供が非常にすばらしいことをしてくれた。これは迷子になっていた子供さんがおられまして、近くに大人の方が誰もいなかった。中学生がそれを見つけて声をかけて、ところが、迷子になっているもんですから、その小さな子供もどうしていいかわからない状態にあったんですね。じゃ見つけて声をかけてくれた子供がどういうふうに対応したかといいますと、実はおんぶをして交番まで行ったんですね。交番までどれくらいの距離があったんでしょうか、もう1キロ以上あったんじゃないかと思えますけれども、そして交番には誰もいらっしゃらなかったということで、近くにある事務所のほうからちょっと電話を借りて、警察のほうに電話をいたしました。そして、警察のほうから来ていただいて、そうこうするうちにその親さんも見つかって、無事に保護者のほうに渡すことができたというようなことがあっております。ということで、その子供さんは警察のほうからも表彰を受けました。そして、鹿島市としても表彰をいたしました。それから、県の教育長さんからも表彰をしていただいております。2月に表彰を受けられたんですけれども、このことについては、県の表彰を受けられたということについては、この4月ごろだったと思えますけれども、市報で紹介をする予定であります。こういった非常に温まる話もございまして、やっぱりそういった子供さんを地域挙げて育てていかなくちゃいけないなということを強く思った次第であります。

もう一つだけ紹介をさせていただきます。

これは子供たちが力を合わせて頑張ったということで、スポーツチャレンジというのをやっております、一度浜小学校でそれに挑戦いたして、すごい結果を出しております。八の字飛びです。八の字飛びで3分間に403回、考えていただければすごいなと思うんですね。そういうふうにして子供たちも力いっぱい、力を合わせながら頑張ってくれておりますので、しっかりとそういった面も含めて応援をしていきたいなと思っております。地域の方にもよろしくをお願いをしたいと思います。

議長（松尾勝利君）

3 番樋口作二議員。

3 番（樋口作二君）

子育て論というか、子供論というか、そういうことをちょっと論じる機会がまた多々あると思いますので、きょうはこれぐらいにして、若年無業者について若干質問いたします。

先ほどは丁寧な資料、新しい数字とかもあわせて示していただきまして、非常に参考にな

りました。

18歳まで、高校卒業までは児童福祉法の範囲内でお世話をするといいますが、そういうことで福祉課内にも職員を置かれているわけですけど、高校を出た後に仕事につけないとか、そういった方を誰が世話するのかなということも非常に難しいことがあるなというふうに思っていましたけど、昨年からですか、生活困窮者自立支援法というのができましたし、来年度から県のひきこもり地域支援センターですか、設立されるというふうなことで、この分野ではこれからますます進んでいくのかなというふうに思いますけれど、鹿島市でいえばやはりある意味人口減というのが言われておりますけれど、超コンパクトな形で漏れなく世話ができるのかなと。そういうふうな情報が非常に集約しやすいといいますが、そういうふうな土地柄かなというふうなことで、民生委員さんの協力で漏れの方の動向も把握できたというふうなことで、これから多分そういう一人一人の支援体制といいますが、そういったことが福祉課内で話し合われて、この家庭はどのように誰と相談して支援をしようかというふうなことが取り組まれるというふうに思います。

何といいますが、IT社会の出現もあるのかなというふうに思いますけど、コミュニケーション力の低下というふうなことで若者が仕事につけないというですかね、一度入ったときに人とのつながりをつくるのが非常に難しいということで減っているというふうなことも指摘されておりますが、私は県のひきこもり地域支援センターができると聞いて、ああ、すごい先進的な取り組みだなと思って調べてみたら九州では一番遅いんですね。多分ある意味鹿島市ではそういう支援を先駆的に取り上げておられるのかなというふうに思いますけれど、例えば、生活困窮者自立支援法の中で、ひきこもり者への対応というのもほかの自治体も取り組んでおられた、そのような状況とか、生活困窮者自立支援法ができる以前はどうだったのか、その辺の話はいかがでしょうか。

議長（松尾勝利君）

橋村福祉課長。

福祉課長（橋村直子君）

生活困窮者自立支援法には、社会的孤立者とか、ひきこもりなどの文字は出てきておりませんけれども、実際にはパンフレット等が佐賀県や厚生労働省でつくられていて、その中の事例としましては、引きこもっていて仕事につけないとか、生活面が苦しいとかというような方たちへの支援ということも載っております。

鹿島市としまして、結局、引きこもるということは健康面や精神面、あと金銭面や生活環境、また地域や社会とのかかわりなど全てに悪影響といいますが、市民が生きづらさを抱えることになりますので、この自立支援法による支援が必要と考えておりますし、実際にそのような方への支援を実施しております。この状況が、先ほどのデータから申し上げますが、今後ますますふえるのではないかと考えております。

議長（松尾勝利君）

3 番樋口作二議員。

3 番（樋口作二君）

私もひきこもり等で何人かの人に相談を受けたこともありますし、なかなかこれは周りの人に相談ができないというか、言えないというか、そういう状況なので、よほど自分から訴え出ることができない、もちろん本人はそうですけれど、家族もできないと。そういうふう非常に周りから見れないという環境がありますので、誰かが声をかけてやるというのが必要だなということを前から思っておりまして、そういうことを絶対しなければいけないというふうになったということ自体が、ある意味すばらしいのかなというふうに思いますが、なかなか福祉の部署も忙しいし、予算もなかなか民生費が多いという先ほどの答弁もありましたけれど、誰か担当者を新しく設けるとか、雇うとか、そういった方向も検討されているんでしょうか。

議長（松尾勝利君）

橋村福祉課長。

福祉課長（橋村直子君）

先ほどの事例の続きなんですけれども、多分議員もいろいろ御存じだと思いますが、パラサイトシングルという言葉がありまして、これは親など同居者がいるため、かえって目立ちにくくなっております。親も隠している状況が見受けられまして、それが親御さん、保護者さんが、高齢者が年金をもらわれている方が、もし家族の方が一人でも亡くなられて、その後、該当されるひきこもりの方が1人になったときには、近隣の民生委員さんなどから、今、議員とかもそうですし、ほかにもいろんなところから相談が寄せられています。

そのケースの状態に応じて、就労支援や生活保護だったり、住居の確保だったり、施設入所など、さまざまな支援とつなげておりますけれども、この場合、ほとんど今ここ半年ぐらい見る限り、精神的に患ってという形での相談が一番多いようです。だから、今、障害者相談員が3人おりまして、身体、知的、精神というふうに分けておりますけれども、障害福祉系のほうに一番多く来ておりますので、やはりこの障害者相談員3名と家庭児童相談員2名と母子相談員、DV相談員、就労支援員という、この8人の体制がやはりその状況、状況に応じて連携をとりながら活動ができるベストな姿だと思っておりますので、誰を担当とつけることなくって、あと高齢者に関しては包括支援センターとも連携をとりますので、今の状況は維持しながら、もしもまたよりよき方向があれば検討するときに来るかと思います。

議長（松尾勝利君）

3 番樋口作二議員。

3 番（樋口作二君）

ますます現場は忙しくなるのかなというふうなことでございますけれど、しっかりチーム

ワークで支えていただければというふうに思います。

最後になりましたが、ほとんどきょう申しました活動、市民部の活動ですけれども、打上部長がこの3月で定年を迎えられるということで、より鹿島市が成熟した社会になるようなメッセージをいただければと。よろしくお願いいたします。

議長（松尾勝利君）

打上市民部長。

市民部長（打上俊雄君）

御指名をいただきありがとうございます。

私、6年ほど前、一回保険健康課長をやったときがありました。当時、非常に気になった話があって、今、高齢者は2つのタイプがあると。1つは親孝行しやすい高齢者、もう一つは親孝行しにくい高齢者ということで、今、親孝行しにくい高齢者が急速にふえている、そういった話がありました。それで、ちょうど2年ほど前、議会のほうで子育てアンケートをやられたことがあったと思います。これは市民交流プラザですね。そこの中を見せてもらいました。

それで、議員言われたように、2世代同居、3世代同居をどう思うかということで、それで、若い奥さんのアンケートが出ていました。そこで一番多かったのが、高齢者の親孝行しにくい行動、自分本位で身勝手な振る舞いが多いということで、例えば、子供を見てほしいときには見てくれないと。自分の気分のいいときだけ子供を見ると、そういったことがアンケートに書いてありました。

そういったことで、今確かに親孝行しにくい高齢者が多いというふうに思います。これは老人クラブや高齢者の集まりでも私はいつも言っているんですけど、やはり人生を重ねられておりますので、人間としてのそれこそ成熟度、魅力をもっとつけて、やはり親孝行しやすい高齢者になってですね。そうしないと、なかなか若者との連携とかできない。

私がちょうど市役所に入ったころ、鹿島人には3つの壁があると言われていました。それは、6地区の壁と仕事観ですね、職業観の壁、もう一つは年代の壁というのがありました。今、地域の壁と職業の壁を感じることはほとんどありません。ただ、この高齢者のことですね、年代間の壁が非常に広がっている感じがします。ということで、自分への戒めも含めてですが、ぜひ親孝行しやすい高齢者に自分になりたい、また市民の皆さん、ぜひ親孝行しやすい高齢者になろうという、そういったメッセージをお送りします。ありがとうございました。

議長（松尾勝利君）

3番樋口作二議員。

3番（樋口作二君）

貴重な意見、ありがとうございました。私も親孝行をされやすい高齢者になろうと努めて

いきたいというふうに思います。

これで私の一般質問を終わらせていただきます。ありがとうございました。

議長（松尾勝利君）

以上で3番議員の質問を終わります。

よって、本日の日程はこれにて終了いたします。

明18日から20日までの3日間は休会とし、次の会議は21日午前10時から開き、一般質問を行います。

本日はこれにて散会いたします。お疲れさまでした。

午後4時20分 散会